

『歎異抄』の第一節を拝読しますと、その文章が三段に切れています。之は改めて申し上げるまでもないのでありますが、曾我先生の『歎異抄聴記』によりますと、香月院師の見解と妙音院了祥師の見解とが紹介されてありまして、了祥師の見解こそ抄の核心を突いているのだと仰せられますが、御尤ものことだと思われまます。了祥師の見解は「二種深信」でありましてそれには間違いないのであります。ところで第一節の表面には現われていないのであります。

『教行信証』の総序の御文をいただきますと、

「竊かに以みれば難思の弘誓は難度海を度する大船、无導の光明は無明の闇を破する恵日なり。」

かようにお示しになってあります。ここには難度海と无明の闇とがあげられています。難度海とは生死の大河であり、无明の闇とはわれわれ煩惱具足の凡愚であります。この御文から伺いますと、抄の第一節の内容は生死解脱の道をわれわれに教え下されたのであることが端的に伺われます。次に気づかれますことは仏心即ち如来の大慈悲心であります。この大慈悲心が抄全体を貫ぬいてい

るのではないでしようか、

そこで第三段の文をいただきますと、

「その故は、罪患深重煩惱識盛の衆生」とありますが、愚老はここに親鸞聖人の関東に於ける廿年の御生活を思い出すのであります。同抄の下篇にはわれわれの宿業問題が大きく取り扱われています。そこには、

「また海河に網をひき、釣をして世をわたるものも、野山に猪を狩り、鳥をとりに命を継ぐともがらも、商をもし、田島をつ

くりてすぐる人も、ただおなじことなり。さるべき業縁のよほせば、いかなるふるまひもべし、とこそ聖人は仰せ候ひしに。」

こうした文がよめるのであります。これがいやというほど聖人の眼にふれたのでないでしようか。ここに尤も具体化された人間生活の有様を読めるのであります。しかしこうした有様を見て見ぬふりするのが、聖人賢者であるかも知れませんが、親鸞聖人は決してさような人ではなかった。いかにもと痛感されたに相違ありません。無条件に同情されたに相違ありません。而して彼等が救われんとすれば弥陀の本願も生きて来ないと信じられたに相違ありません。そこで抄の結分に移りますが、

「しかれば本願を信ぜんには、他の善も要にあらず、念無にまさるべき善なき故に。悪をもおそるべからず、弥陀の本願をさまたぐるほどの悪なきが故に、」

かように仰せられています。しかし之は決して人倫道徳を無視した見解ではなく、最底の人間生活を認めざるを得ないところからの宣言であると思われらるのであります。かように伺いますと、聖人こそ永遠に生きぬいる人でないでしようか。而して聖人なればこそ弥陀の本願を体解された人でないでしようか。

支那仏僧の入竺路に就いて

諷 訪 義 讓

一、支那求法僧の入竺路に就いては印度に近い方面の研究が疎かになり勝ちになっている。それは支那を研究の中心とする人々が印度の領分であると考えたのと事実上支那の記録が不十分であり、不明確である為であった。がそれ等の方面の資料は支那の記録が絶対的なものであるからそれに基づいて研究を進めなければならぬ。この時、印度方面から眺めると言う「観点の転換」が必要であろう。実はかかる開眼を為さしめたのが私の今回の印度旅行であった。

二、私の印度旅行は始め仏跡の巡拝が目的であったが愈々出発するに当たり出来るなら仏教伝播の史蹟を多少でも視察調査して来たいと思ひ立つた。勿論内地で充分計画を為し得なかつたが印度の現地デリーで機会を得て先づネパールに入り更らにパキスタンを経てアフガニスタンのカブールまで辿り着いた。その間ベンジャワールからカイバル峠を突破したのであるが又ベンジャワールからスワットのバレーを視察した。還つてデリーから改めてカシュミールに飛んだ。是れが大体始めに思ひ立つたところであるが幸にしてそれ等を魔事なく完了する事が出来た。

三、愈々帰路セイロン、アレイシャ、タイ等を訪問するに先立ちデリーに於て暫く名残りを惜んでいた。その時、予定の史蹟を一応視察し終つた喜びを感じると共に次の様な事が脳裏に浮んで来た。即ち私の訪れた土地は印度の中央に通ずる道路の重要地点に当り而もその様な道路の総てを何づれかの地点で確め得たという自信であった。その道路の総てと言うのは一にカイバル道二にスワット道三にカシュミール道四にネパール道五にカルカッタ道であった。恐らく印度中央に通ずる入竺路はこの五つに限られてい

るであろう。

四、是れを尽く一応視察し得た私は更らに是れより山間接壤地帯の道路を推察考定出来る様になつたと想う。今はそれを論述する暇を有しないがともかく印度方面より入竺路を逆に考察すべき「観点の転換」を気付かしめられた。因みに私の究明した交通上の重要地点が取りも直さず仏教の出入した所謂「伝播基地」であつた事も附け加えておこう。

他に「法要の場における読経の意味の理解をめぐる」と題して前田恵字氏の発表がありました。

尚、本大会には左記の通りシンポジウムを行なつた。
僧伽について

戒律と教団	佐々木	教悟
国家と仏教	野上	俊静
真宗教団の性格	細川	行信
僧伽の理念について	西山	邦彦